

東京新聞、神戸新聞等

26誌

2015年1月5日等

沖縄タイムス

2015年1月5日

時の人

南極天体観測に好条件

「南極に『新ドームふじ基地』が完成し、銀河の広域探査と星生成活動の研究が進むようになれば、銀河誕生の秘密が分かるかもしれない」。筑波大教授で巨大質量ブラックホール研究の第一人者。新基地建設と大型天体望遠鏡設置

新基地提唱
筑波大教授

なおまき
中井直正さん



に向けた観測条件調査と技術開発を行っている南極天文コンソーシアム代表を務め、東北大、国立極地研究所、国立天文台と連携して南極天文学を提唱する。南極はブリザードが吹き荒れている印象が強いが「今のドームふじ基地近くの新基地予定地は海拔約4千メートルの内陸部高地で、晴天率は高い」。第54次南極観測隊による2013年調査で、天体観察の障害となる水蒸気の量が非常に少なく、「大気のゆらぎ」が「地球上で最小であることも分かった」。冬季は太陽の光が差さないので、24時間の連続観察が可能だ。「新基

地では天文学の研究者5人を含む10人以上の越冬を想定している」

だが難題も多い。「新基地建設には毎年数百トンの燃料、食料などを運搬しなければならぬ」。厚い氷が輸送船の接岸を阻む可能性がある。起伏がある氷雪の中を雪上車で精密機器の望遠鏡を損傷なく運び込む必要もある。そして何より計画実現には費用が掛かる。

「米国や中国も本格的な南極での観測に向けて動いている。私たちの計画に国の予算が付けば2020年に基地が完成、21年には観測開始が可能になる」。還暦となったが「すぐにも現地調査に行き、望遠鏡も設置したい」と心は天体少年のままだ。富山県生まれ。

東京新聞 2015年2月4日

南極天文学を提唱する筑波大教授 なか い 中井 なおまき 直正さん(60)

「南極に『新ドームふじ基地』が完成し、銀河の広域探査と星生成活動の研究が進むようになれば、銀河誕生の秘密が分かるかもしれない」。筑波大教授で巨大質量ブラックホール研究の第一人者。新基地建設と大型の天体望遠鏡設置に向けた観測条件調査と技術開発を行っている南極天文コンソーシアム代表を務め、東北大、国立極地研究所、国立天文台と連携して南極天文学を提唱する。

南極はブリザードが吹き荒

れている印象が強いが「今のドームふじ基地近くの新基地予定地は海拔約4000メートルの内陸部高地で、晴天率は高い」。天体観察の障害となる水蒸気の量が非常に少なく、「大気のゆらぎ」が「地球上で最小であることも分かった」。冬季は太陽の光が差さないので24時間の連続観察が可能だ。

だが難題も多い。「新基地建設には毎年数百トンの燃料、食料などを運搬しなければならない」。厚い氷が輸送船の接岸を阻む可能性がある。起

この人



伏がある氷雪の中を雪上車で精密機器の望遠鏡を損傷なく運び込む必要もある。

還暦となったが「すぐにも現地調査に行き、望遠鏡も設置したい」と心は天体少年のままだ。(牧野俊樹)